

大後笑樂瘦 人秋淨瑠繩芝屋

全頁幻戲樂行



第七回

筋橋橫舞傷

親切感謝明る帝都

愛國百人一首

初春の初日かゞよふ神國の神のみかげをあふげもろもろ

荒木田久老

八東穂の瑞穂の上に千五百秋國の秀見せて照れる月かも

橘 千蔭

香具山の尾上に立ちて見渡せば大和國原早苗とるなり

上田秋成

かけまくもあやに畏きすめらぎの神のみ民とあるが樂しさ

栗田土滿

遠つ祖の身によろひたる緋緘の面影浮ぶ木々のもみぢ葉

蒲生君平

大日本神代ゆかけて傳へつる雄々しき道ぞたゆみあらずな

賀茂季鷹

青海原潮の八百重の八十國につぎてひろめよ此の正道を

平田篤胤

一方に靡きそろひて花すゝき風吹く時ぞみだれざりける

香川景樹

安見しゝわが大君のしきませる御國ゆたかに春は來にけり

大倉鷺夫

かきくらすあめりか人に天つ日のかがやく邦のてぶり見せばや

藤田東湖

大阪
 文樂座人形浄瑠璃芝居
 吉例全員引越興行

假名手本忠臣藏

第七回外題 (卅一日より
 四日まで)

鶴ヶ岡兜改めより祇園一力茶屋まで

鶴ヶ岡兜改めの段
 下馬先進物の段
 殿中双傷の段
 裏門の段
 花籠の段
 鹽治判官切腹の段
 霞ヶ關の段
 二つ玉の段
 身賣の段
 早野勘平切腹の段
 祇園一力茶屋の段



決戦下服装に就き

皆様へ御願ひ

今こそ決戦、一億總蹶起の時、撃ちて止まむの氣慨に燃へて戦争生活の實踐に徹底せねばなりません。演劇、演藝、映畫亦決戦下必要不可欠な戦争生活の一部面であることは今更申すまでもなく、隨て御觀覽は戦争生活の一部であり延長であります。

既に戦争生活の延長である以上、御觀覽の御態度、御服装等飽くまで國家の要求に融け込まなければならぬと存じます。

従來、御觀覽の場合、動もすれば服装華美に流れ過ぎると云はれました。平時なら兎も角、此の決戦下に左様のことのあるべき筈はありませんが、然し大勢様御集りの劇場ですから服装は格別目立つな服装を以て場内を御埋め下さい。そして御心豊かに朗らかに、決戦下必要不可欠の健全娛樂を御覽下さいませ。

新調は
見合せ
今後の衣
生活は
からしま
しより

のでありまして、その場合の服装が時代の流行を作るとさへ云はれました、事實そうだったのであります。

だから今日御集り下さる皆様が服装の簡素美、剛健美、明朗美に徹底致され率先範を垂るるの思召しで、總て決戦下にふさはしい服装を御召し下さらば、それが一代の風俗を作り逞ましい日本人の心意氣となつて決戦下一億の士氣はいやが上にも昂揚さるるに至りませう。

どうぞ皆様。これからは、殿方も、御婦人方も、假りにも炯爛華美などと云ふ舊觀念を美事一蹴し、簡素、剛健、明朗

乍憚口上

御ひゐき皆々様彌々御清祥の段大慶至極に奉存候 扱て當る七月興
行の儀は當場吉例により大阪名物文樂座人形淨瑠璃を迎へ本邦特有
の由緒深き世界に誇る古典藝術の御鑑賞を願ふことと相成り候
今度も太夫、三味線、人形遣全員上京致し名曲數々選擇の上豪華
麗なる配列をなし十分に古典の妙味を發揮致す事に苦心罷在候へば
必ずや御期待に添ひ得るものと確信仕候 何卒倍舊の御引立を以て
陸續御來場の上御批判御評判の程伏て奉懇願候

昭和十八年七月吉日

文 樂 座 敬白

昭和十八年七月一日初日

毎夕四時開演

外題 五日目替り

◎各等學生團體に限り半額

御 觀 劇 料

- 一 等：(御一名)：七圓三十五錢(稅九割共)
- 二 等：(御一名)：四 圓(同六割共)
- 三 等：(御一名)：二圓四十錢(同)
- 三 階：(御一名)：一圓十錢(同四割共)

切符取所
銀座地下鐵街芝居切符賣場
ブレイカイド各店取扱
銀座本店電話京橋(五〇一)一三まで

切符賣場 電話銀座 七七五七
事務所用 電話銀座 一九〇
客 用

木挽町

新橋演舞場

文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちそうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由来——舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと云つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、

この三四十年来、殆ど本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと云はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達し

て來たかといふに、さうではなかつた。人形を遣ふといふこと、これはさうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子(くぐつまはし)といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことにある。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と云へるでせう。これに對して三味線は永祿中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが

提携し、慶長の初年あたりは、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、云はば立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音楽上の大成を試み作者近松門左衛門を得て、戯曲の展開をも試みたのは、元禄時代のことになる。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば、義太夫節に限るやうになつたのであつた。これは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線による演奏内容と、人形の動作とがピッタリ合致して、三者調調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これ

も歴史的に云ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノボーから肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と、人知とが費された。一個の人形を三人がかりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道満大内鑑」(葛の葉の狂言)からといふことになつてゐる。今日から大凡二百年前にあたる。但し文樂座でもツメ人形(略してツメ)と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載さ

れてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむづかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた。慶長以前の傀儡子時代の、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治の舞臺でも、歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大坂

文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、その以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない繰繰り式のもつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該当する部分が二の手である。

二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて、二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたからの名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃のは、特別の

場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差上げて遣つたもので、「蔭語り、蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。それが次第に「出語り、出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひぱりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。

けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの、人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より抜萃)



鶴ヶ岡兜改めより

戀歌まで

通し 狂言 假名手本 忠臣藏

鶴ヶ岡兜改めの段より祇園一力茶屋の段まで

足利直義公

豊竹つばめ太夫

高師直

豊竹千駒太夫

顔世御前

竹本越名太夫

桃井若狭助

竹本津摩太夫

鹽冶判官

豊竹松島太夫

竹澤園六

解説

浅野長矩が吉良義央を千代田城中で傷けたのは、元祿十四年三月のことで、同十五年極月の雪の夜には臥薪嘗膽の四十七士が吉良家に討入復讐の舉に出で、翌十六年二月四日に至つて一件落着、四十七士は各々切腹を賜つたのであります。土風が漸く頹廢に向つた元祿の世に、これこそ忠義の鑑よと世上の人氣は頗る湧立ち、三人よればその噂が出ると思ふ有様だつたので、當時の操り座や歌舞伎狂言座では巧みに際物脚色の禁制を潜り、この赤穂義士の狂言を競つて上演いたしました。

最初に此の事件を取入れ脚色された狂言としては、事件落着後わづかに十二日を經

た元祿十六年二月十六日より江戸中村座で『噂曾我夜討』で曾我十郎、五郎を吉良家討入に擬して演じましたが、當局に遠慮して數日中止に至りました。

操淨瑠璃に初めて此の四十七士の一件が脚色されたのは三年後の寶永三年五月大阪竹本座で、近松門左衛門作の『兼好法師物見車』及び翌六月に其の後追ひ狂言として出した『基盤太平記』が濫觴で、太平記の世界をとつて、大石内藏助を大黒由良之助に、吉良上野介を高師師直、淺野内匠頭を鹽谷判官にした。これが由良之助や師直などが世に出た始めてあります。

是等を先驅として、四十七義士の銘々傳それに關聯した義士外傳など、歌舞伎に採りに上演された赤穂義士劇は、その數百に

人形

足利直義公 桐竹紋司

高師直 桐竹門造

顔世御前 桐竹龜松

桃井若狭助 吉田光造

鹽冶判官 吉田玉助

大名 大ぜい

仕丁 大ぜい

も餘らうとして居ります。その中で最も人
口に膾炙された代表的な傑作が今回上場
の『假名手本忠臣蔵』で、これは竹田出雲を
忠心に三好松洛、並木千柳の合作に成る雄
篇、寛延元年八月大阪竹本座の採りに初め
て上演され、古今の大當り大好評で、その
年の十一月まで興行を続けることが出来ま
した。

全十一段の長篇で、初演の折の見出しに
は、第一鶴ヶ岡の響應、第二諫言の寢刃(松
伐)、第三戀の意趣(箱騒動)、第四來世
の忠義(判官切腹)、第五恩愛の二ツ玉(鐵
砲の段)、第六財布の連判(おかる身置、
勘平切腹)、第七大蠢の錆刀(一力揚屋の
段)、第八道行旅路の嫁入、第九山科の雪
轉、第十發足の櫛笄(天川屋)、第十一合
印の忍兜(討入)とあり、以來大阪の主要
座で慶應末年迄に繰返されただけでも七
十餘回にのぼつて居り、採りのみならず歌
舞狂言に入つて上演された回数を加へる
と、全國に於て、今日迄に果して何回繰返
された事でありませう。

忠臣蔵が、斯くの如く世に歡迎された原
因としては、種々と其理由を挙げる事が出
來ませうが、其第一は、何と云つても作柄
の勝れて居る事でありませう。題材は世上に
大人氣のある義士物語であることは勿論、
其中から、成る可く劇化して成功しそうな
部分を巧みに抽き出し、又此忠臣蔵より前
に脚色された諸作を土臺として、一般觀衆
の持つその豫備智識を利用し、筋の發展は
成る可く陰に置いて、一見關聯の無ささう
な場面を見せつつ、其間に不即不離の關係
を持たせて終始して居ります。人形劇とし
ても、その最盛期の作品であり、時代的に
云つて、演劇的技巧も最頂點に達して居る
當時の作品であります。

即ち、大序は大時代風の壯麗な鶴ヶ岡社
頭の場に始り、次に大名生活の一斑を示す
松伐諷言から、刃傷切腹と云ふ殺氣だつた
場面に移り、それから一轉すれば山崎街道
の二ツ玉から、さびれた農家に於るお輕の
身置り、勘平の切腹と云ふ悲劇的場面の展
開、次は忽然と轉じて紅燈綠酒の巷、目も

眩い祇園一方の茶屋、又々轉じて、路の嫁入の景事から、山科の雪の日子を思ふ老武士土藏の最後、更に義商天川屋の店頭より討入の大團圓までの十一段巧緻を盡した構成は、義士劇中の白眉であるばかりでなく演劇史上最高の代表作の名に背かぬものであります。

忠臣蔵が歌舞伎に移して演じられたのは書下されたその年の十二月、大阪の嵐三五郎座で、江戸では翌寛延二年七月に堺町の三座が競つて上場したのが始まりであります。それ以後今日に至るまで約二百年、淨瑠璃に於て、又歌舞伎に於て、數多の名人名優の苦心を重ねた演出が考案され、人形の演出は歌舞伎に影響し、又歌舞伎の演出は人形に影響し、洗練に洗練を重ねて今日に至つて居ります。

當文樂座の忠臣蔵も、典雅な人形の古風と、名人によつて語られた風格を残しつつ、あらゆる技法を取り入れた代表的演出の一つであります。

なほ因みに附言すれば、現在歌舞伎で上

演ずる「道行旅路の花聲」、俗に「落人」と呼ばれて居りますお輕勤平の道行は、後に三升屋二三治によつて三段目の裏として書卸されたもので、今回「刃傷の段」の次に上演される「裏門の段」がその骨子となつて居ります。

梗概

大序 兜改めより

祇園一方茶屋の段

へ嘉肴ありと雖も、食せざれば其味を知らずとは、國治まつて、よき武士の、忠も武勇も隠るるに、譬へば星の晝見えず、夜は亂れて顯はるる、例をここに、假名書の、太平の世の政頃、は曆應元年二月下旬、足利將軍尊氏、新田義貞を討亡し京都にその居をかまへ、その折鎌倉鶴ヶ岡八幡宮造當を成就し、代參として舍弟足利直義を鎌倉に遣すことになつた。

鎌倉下着のこの日、直義は新田義貞の兜を當社の寶藏に納めよと命じたのであつたが、奉納のこと宜しからずと反對したのは執事高武藏守師直であつた。「義貞討死したる時は大わらは、死骸の傍に落散つたる、兜の數は四十七、どれがどうとも見知らぬ兜」と横柄にさへぎつた。伯州の城主鹽治判官高定がその中に入り、直義公のことがかかつて、鹽治の奥方顔世御前が呼出されることになつた。それは往時元弘の亂の折、義貞がその兜をかきこきあたりより拜領した當時、顔世は十二の内侍のうち兵庫司の女官であり、これを見知つてゐたからである。郎黨たちは直ちに唐櫃から兜を一つ一つ顔世の面前に差出したが、その中に名香かほる五枚鍔の龍頭、これぞ義貞の兜に候、と見極めることが出来た。直義公も大満悦の態で、鹽治、桃井、その他

下馬先進物の段

豊竹千駒太夫

豊竹のほめ状

鶴澤友衛門

殿中刃傷の段

豊竹呂太夫

豊澤仙糸

諸大名を引具して、兜は寶藏へ納めよと立ち上つた。

後に顔世はひとり残つてつき穂なくさて師直に會釋して立ち去らうとするのを留めた師直は、袖すりよつてそつと顔世の袂に緯文を入れるのだつた。

師直の色好みは知らないではなかつたがこは何ごと、うは書きを見れば、顔に似合はぬ様參る、武藏あぶみと書いてあるのに、ハツとしたけれども、はしたなく恥しめては夫の名も出ることゝものも云はずに投返してしまつた。

師直は流石に人に見られてははづかしとわが文を再び懷中にしたのだが、「くどうは云はぬ、天下を立てうと伏せうとも、まゝな師直、鹽冶を生かすも殺すも、顔世が心たつた一つ」と意味ありげに嘯くのだつた。折から來あはせた若狭之助は、又いつもの非道と見て取つて、それとなく顔世に退出を

すゝめた。さては氣取られたかと師直は、なほも弱味を見せず若狭を悪口するるので若狭もくわつと急ぎ立ち、あはや刀の鯉口に手をかけた折しも、「還御」の制止の聲、詮方なくも期を延ばす無念の胸をおさへた。そこへ來た鹽冶判官は、明日はわが身の敵となるも知らず兩人の仲へ割つて入り、直義公の悠々たる還御を見送つたのである。

足利左兵衛督直義公が關八州の管領として新に建てた御殿の装ひに、大名小名今日を晴れと各々装束も美麗に新御殿につめて居た。

今日の馳走のお能の催しも、脇能を過ぎて樂屋からは鼓の調べ、太鼓の音もめでたく直義公は御機嫌いやが上に斜めならざることが傳へられてゐた。若狭之助は鶴ヶ岡社頭の怨恨、今日こそ師直を眞二つと刀の鯉口に息をつめ

て待ちかまへて居た。早くもこれを見つけた師直は、兩腰をなげ出しての平あやまり、手をあはせて詫びるので若狭もいさゝが拍子抜けがした貌だつた。それと云ふのは、實は若狭の家老加古川本藏が、今日登城の若狭の助にかゝることあるのは必定と、師直に莫大な金品の賄賂を使つた結果だつた。

張りつめた氣も弛んだ若狭の助は師直を尻目に、奥の一と間に入つた。

程もなく來かゝつた鹽冶判官を、師直は見るなり「遅い〜」と意地わるく咎めたてたのは、底意あつてのことだつた。判官は袂から文箱をとり出し、奥顔世より貴公へ何か、と手渡すので師直は、さては色好い返事でもあらうかと俄かに相好をくづし取出し讀み下すと、「さなきだに重きが上のさよ衣、わがつまならぬつまな重ねそ」と記されたのは古今集の古歌だつた。

思案した師直は、戀の叶はぬしるしばかりで無く、さては夫に打明けたかと憤りに燃えたが、さらぬ態で、ぢり〜と判官をなぶり始めた。ちつとこらへて居た判官も「これは〜師直殿には御酒樽嫌か」とわらひにそらさうとしたが、師直は更に云ひつものつて、出放題の悪口雑言、殿中なり大事の役目なり、こゝで事荒だてゝはと胸をさすつて居たが、それをよいことに師直はのさばりかへつて愈々悪口して立ち去らうとするので、遂ひに腹に掘えかね「今の悪言は本性よな」と詰めよつた。「本性なりや何うする」と云ふ師直を、かうするとばかり抜打ちに眞向へ切り付けた。お次の間にかねてから控えて居た加古川本藏は、一大事とばかり走り出で、判官を抱き止めるので師直は辛うじて一命を得たのであつた。

かうした上を下への大騒動に、館は表門裏門兩方閉めきつて、提灯の光も物々しく閃めき渡るその中に、鹽冶の家來早野勘平は、主人の安否心もと無しと御殿の裏門へ走り來て破れよとばかり打叩いたが、中よりの返事は、喧嘩の次第は相済み、鹽冶判官は慮外の科によつて閉門仰せ付けられ、網乗物で既に歸られたとのことだつた。さて三無三寶、閉門とあつては館へは歸られず、腰元お輕とわづかの逢瀬にあつたばかりにお供に遅れ、人中へ兩腰差しては出られぬ身となり、もうこれまでと覺悟を決めた折り、お輕はこれを見て「その狼狽武士には誰がした、皆、わしが心から、死ぬる道ならお前よりわたしが先へ死なねばならぬ、今お前が死んだならば、誰が侍ぢやとほめまする、こゝををつくつと聞き分け、私か親里へ一トまづ來て下さんせ、

人形

下馬先進物の段

高師直 桐竹門造

驚坂伴内 吉田光造

加古川本藏 吉田玉市

鹽冶判官 吉田玉助

早野勘平 桐竹紋十郎

奴 大ぜい

殿中刃傷の段

桃井若狭助 吉田光造

高師直 桐竹門造

茶道珍才 吉田龜夫

鹽冶判官 吉田玉助

加古川本藏 吉田玉市

大 大ぜい

父様も母様も在所でこそあれたのもし
い人、もうかうなつたも因縁ぢやと、
思ふて、女房の云ふことも、聞いて下
され、勘平殿。」と可憐にも勘平にかき
くだくのであつた。

勘平も思案して、お家の執權大星由
良之助殿の歸國を待つてお詫びせん
と、思ひとゞまつて、身拵へするとこ
ろに、師直の家來驚坂伴内は家來を引
つれ、かねて戀慕のおかるを渡せと奔
めくのを、勘平は追ひのけはねのけ、
伴内をとつちめるので、伴内も命から
なく逃げ出した。

「彼奴を殺らさば不忠の不忠、一先づ
夫婦が身を隠し、時節を待つて願ふて
みん、も早明六つ、東が白む、横雲に
晴を離れて飛ぶ鴉、かわい／＼の女夫
連れ、と主人の身を案じつゝ、お輕が
在所へと立退いたのである。

鹽冶判官は閉居と云ふことになつ
て、扇ヶ谷の上屋敷は、大竹で門戸を
閉ち家中の外は出入を止め事嚴重な日
が經つて行つた。

今日は、殿のお心を慰めにもなるか
と、奥方はじめ大星力彌その他、鎌倉
山の八重九重の櫻花など花籠に麗しく
生けて御前に供した。

その折柄、上使として何ごとかの報
をもたらせたのは、石堂右馬之丞、藥
師寺次郎左衛門の兩人であつた。

判官も一間よりしづ／＼と立ち出で
御上使の趣き承ると、自ら下座にさ
がつて、平伏した。

「この度、鹽冶判官高定、私の宿意を
以て執事高師直を刃傷に及び、館を騒
がせし科によつて、國郡を沒收し、切
腹申付くるものなり。遂に最期の
宣言は下されたのである。

判官は動する氣色もなく、御上意の

裏門の段

早野勘平 竹本濱太夫

腰元おかる 竹本越名太夫

鷺坂伴内 竹本隅若太夫

鶴澤重造

人形

早野勘平 桐竹紋十郎

腰元おかる 吉田文五郎

鷺坂伴内 吉田光造

取巻 大ぜい

趣き、委細承知仕る、と辭かに答へ

た。師直と昵懇の薬師寺は、判官の姿

を見て、當世様の長羽織、ぞべらく

としらるゝは、酒興か、但し血迷ふた

か、と口汚く詰め寄るのを、判官は莞

爾と受け流し、大小羽織をぬぎ捨てる

と、下には用意の白小袖、無紋の上下

に死装束をかためて居たのだ。薬師寺

は二の句も出さず閉口するばかりだつ

た。石堂は、御心底察し入る、心静かに

御覺悟、と慰めると、あゝ御親切忝け

なし、恨むらくは館にて、加古川本藏

に抱き止められ、師直を打洩した無念

さ、と判官は此のことばかりを心残り

とする態だつた。

次の間からは一家中の者どもが、殿

御存生中に御尊顔を拜したき願ひ、と

聲々に申出たのであつたが、國元より

大星由良之助到着するまでは無用、と

許されなかつた。

力彌は御意を承り、かねて用意の

腹切刀を御前になほしたので、判官は

心静かに肩衣取除け九寸五分を押戴い

た。然し、今生にたゞ一言、由良之助

に會つて遺言したさに、何處か力彌を

召して由良之助の到着を未だか未だか

と尋ねるのだつた。

今は是非に及ばず、これまでと刀逆

手に取直し左手に突立て引廻す所へ、

廊下の襖踏開き息を切つて駆込んで來

たのは由良之助だつた。後につゞいて

千崎、矢間その他一家中ばらばらと駆

け入つてうづくまつた。判官は無念の

思ひを訴へやうとするのだつたけれど

由良之助は皆まで言はさず耳元に口を

寄せ、委細承知、仕る、この期に及び

申上ぐる言葉もなし、たゞ御最期の尋

常を、と申上げるので、判官は苦しい

花籠の段

竹本相生太夫

野澤吉五郎

我が鬱憤を晴させよ、と無量の思ひを込めて息絶えたのであつた。

由良の助はにぢり寄つて刀をとりあげ押戴き、無念の涙はら〜、判官が最後の一言は五藏六腑にしみて、この時にこそ、大星の忠臣義臣としての根ざしが胸底深くきざまれたのであつた。

鹽冶判官切腹の段

竹本大隅太夫

鶴澤清二郎

今はその場に泣きくづほれる御臺所を慰めつゝ、判官の骸を乗物に納め、力彌を頭に一家中の者どもをして、御菩提所へと亡君の御供をさせた由良の助であつた。

霞ヶ關の段

豊竹松島太夫

豊澤園伊三

御見送りをした一同は再び座につき今後の處置につき色々と談合したのであつたが、大星の胸中には深い用意があつたし、一應離散した上でと云ふことになり、今日をかぎりとして御殿に名残を惜しみながら、退去することに

なつた。一家離散の自家の門前に立つた由良の助の心中は實に感慨無量だつたのは云ふまでもない。足下の提灯に主君の紋所あるを押戴いて袖をさめ館に名残を惜み、涙ながらに立去つて行くのであつた。

早野勘平は、お輕に誘はれるまゝにお輕の在所、山崎の片ほとりに世を渡る元手にもと、山中の鹿猿を獲物にその日の暮しを立て居た。風のたより聞けば、大星はじめ一味のものが、復讐の企てをして居るとのこと、自分もその仲間に入れて貰ひたさに一人氣を揉んで居た。

お輕の父與市兵衛は、婿の勘平を、如何かして再び武士として世に出したばかりに、勘平には内證でお輕を祇園町へ勤め奉公に出す約束を整へ、半金五拾兩を持つて一人とば〜夜道の

人形

花籠の段

顔世御前 桐竹龜松
 大星力彌 桐竹紋司
 原郷右衛門 吉田小兵吉
 斧九太夫 桐竹門造
 こし元 大ぜい

判官切腹の段

石堂馬之丞 桐竹政龜
 樂師寺次郎左衛門 吉田玉徳
 鹽冶判官 吉田玉助
 大星力彌 桐竹紋司
 原郷右衛門 吉田小兵吉
 大星由良助 吉田榮三
 千崎彌五郎 吉田榮三郎
 矢間重太郎 桐竹紋太郎
 顔世御前 桐竹龜松
 諸士 大ぜい

霞ヶ關の段

大星由良助 吉田榮三

山崎街道を我が家へ急いだのであつた。

水無月の大夕立の中を、與市兵衛の後をつけて來た曲者があつた。斧九太夫の悴、定九郎、今ではこの街道の夜凧きをして居る無頼漢である。

蛇に見込まれた蛙とでも云はうか、かき口説く與市兵衛に情をかけ様告もなく、定九郎は與市兵衛を慘らしくも刺し殺してしまつた。奪ひ取つた財布の中には五拾兩、忝ひなしとほくそを笑んで財布を首へかけ、與市兵衛の死骸を谷底へ蹴んで立ち上る後ろから、逸散に驅來たのは手負の猪だつた。危いとばかり物蔭に身をひそめて遣り過し立去さらうとした途端、背骨へかけてどつさりとおかへ抜けた二つ玉、それは猪を狙つた勘平が撃つた彈丸だつた。定九郎はうんと云はずその場に斃れてしまつた。

猪打留めしと勘平は、あやめも分らぬ闇の中をさぐり寄つて見れば、猪にはあらず、「これや人、仕損じたり：し」と抱き起したけれど己に息は絶えて居た。その手先に不圖觸つたのは與市兵衛から奪つた金財布……
 今宵にせまる金子入用のことに思ひあつたが、道ならぬことと思ひ返してもみた。然し遂に之ぞ天の與へん決心して懐中し、我が家を指して逸散に飛ぶが如く急ぎ歸つたのである。

みさき踊りがしゆんだる程に、と麥搦きの在郷歌も遠近の、此處は山崎の片邊り百姓與市兵衛の住家である。
 夫の勘平はゆうべ獵に出て未だ歸つては來ず、おかるは寝亂れの髪など梳き返して居た。母は、祇園町へ行つた與市兵衛の歸りが遅いので、どうやら氣にかゝるので、おかるとそんな噂を

二つ玉の段

竹本七五三太夫

鶴澤綱造

胡弓 野澤錦糸

身賣の段

竹本伊達太夫

野澤喜左衛門

早野勘平切腹の段

切 豊竹古鞆太夫

鶴澤清六

始めて居た。
と其處へ駕籠をかゝせて訪れたのは
祇園町の一文字屋の亭主才兵衛だつ
た。

おかるは、男のため此の一文字屋へ
身を賣ることにしたので、約束の縮銀
は金百兩、五年の年期と云ふことにし
て、昨夜與市兵衛殿が云はるゝには、
今夜中に是非渡さねばならぬ金があれ
ば、證文を認めて直ぐ百兩の金を貸し
て下され、と涙をこぼしての頼み故、
證文の上で半金渡し、残りはおかるの
身と引かへにしやうと今おかるを連れ
に來たのだ、と云ふのである。

然し、その與市兵衛は未だに歸つて
來ないのだ。證文に確かな與市兵衛の
印形があるからば一文字屋を疑ふこと
も出來ない。才兵衛は後金の五拾兩を
渡し、無體にもおかるを駕籠にのせて
門口を出やうとする所へ立ち歸つたの

は夫勘平だつた。

勘平は才兵衛から詳しい様子を初め
て聞いて驚いた。おかるの身賣りと云
ふことも意外であつたし、それにゆふ
べ與市兵衛に五拾兩の金を入れて渡し
てやつたと云ふ才兵衛の着てるる單物
の布で拵へた縮の財布のこと。ハツと
した勘平は袂の財布と見合はせてみる
と、寸分違はぬ糸入縮、さては昨夜鐵
砲で打殺したのは舅與市兵衛であつた
かと、我が胸板を二つ玉で打ぬかれる
思ひであつた。

さうとも知らぬ女房のおかるは、そ
は／＼してゐる勘平に、やるものか、
やらぬものか、分別して呉れと、しき
りにせき立てるので、勘平も觀念の臍
をかためて、おかるをそのまゝ一文字
屋に渡すことにした。父親の非業の死
も知らずに祇園町へ賣られて行くおか
るを、勘平はふびんにもいぢらしいも

人形

二つ玉の段

斧定 九一郎 桐竹龜松
百姓與市兵衛 桐竹紋太郎
早野 勘平 桐竹紋十郎

身賣の段

與市兵衛女房 桐竹政龜
娘 おかる 吉田文五郎
一文字屋才兵衛 吉田玉徳
早野 勘平 桐竹紋十郎
駕 かき 大ぜい

勘平切腹の段

與市兵衛女房 桐竹政龜
早野 勘平 桐竹紋十郎
めつぼう彌八 吉田兵次
種ヶ島の六 吉田常次
狸の角兵衛 吉田駒三郎
原郷右衛門 吉田小兵吉
千崎彌五郎 吉田榮三郎

のに思はないでは居られなかつた。

才兵衛たちの出て行つた後を見送つ

た母親は、與市兵衛の遅い歸りをなほも柔じて居る所へ、近所の獵師たちがどやくと、與市兵衛の死骸を戸板にのせてかつぎ込んで來たのだ。母親の狼狽は云ふまでもない。それにつけても婿の勘平のさつきからの素振りが胸に落ちなかつた。舅にゆうべ何處やら會つたなど云ひ、それにさつき勘平が着物を着かへる時にちらと見た血のついた縞の財布。

「隠しても隠されぬ、阿爺殿を殺して盗んだ其の金は誰にやる金ぢや。身貧な舅、娘を賣つたその金の中で半分くすねて置いて、皆やるまいと思ふで、殺して盗つたのじやな。こりやこゝな鬼よ蛇よ、父様返せ、阿爺殿を生けて戻せ」と老いの愚痴も交へて勘平をさ

いなんだ。勘平も身のあやまりに、唯疊に喰付くばかり天罰と思ひ知つたのであつた。

折こそあれ、この家を訪れた深編笠の侍二人、一人は原郷右衛門、一人は千崎彌五郎だつた。

この二人が勘平宅を訪れたと云ふのは、勘平が亡母の御石碑料として調達して來た多くの金子は、殿に不忠不義をなした者とあつて、大星由良之助から封のまゝ戻して來たのであつた。

勘平は氣も轉倒するばかり、母は涙と諸共に昨夜からの事の経緯をつぶさに語るのだつた。

彌五郎はこれを聞いて怒りをなし、非義非道の勘平を眞二つと、つめ寄つたが、郷右衛門はこれを制して、懇々と勘平を悟し、勘平の行跡は亡君の御恥辱、とまで言葉を極め、理を盡して説いた。勘平もたまりかねて、脇差を

祇園一力茶屋の段

平	九	伴	亭	仲	仲	お	仲	彌	喜	重	力	由
右	太	内	主	居	居	か	居	郎	太	太	彌	良
衛	夫	竹	主	豊	竹	る	竹	豊	竹	竹	竹	助
門	夫	本	豊	竹	本	竹	本	本	本	本	本	豊
	鶴	竹	豊	竹	本	竹	本	本	本	本	本	竹
	澤	本	竹	竹	本	本	本	本	本	本	本	竹
	觀	本	竹	竹	本	本	本	本	本	本	本	竹
	西	本	竹	竹	本	本	本	本	本	本	本	竹
	翁	本	竹	竹	本	本	本	本	本	本	本	竹

抜くより早く我が腹につき立てた。

「われ男を殺せしこと、亡君の御申辱とあれば、一連り申聞かん、兩人とも聞いてたべ。夜前、彌五郎殿のお目にかゝり、別れて歸る暗まぎれ、山越す猪に出遇ひ、二つ玉にて打留め駈寄つて探り見れば、猪にはあらで旅人。

南三三賣、過つたり、薬はなきかと懐中を、捜し見れば、財布に入れたるこの金。道ならぬことなれども、天より我に與ふる金と、すぐに馳せ行き彌五郎殿に、彼の金を渡し、立歸つて様子

を聞けば、打留めたるは我が男、金を女房を賣つた金、か程まですることなすこと、いすかの嘴ほど違ふと云ふも武運に盡きたか勘平が、身の成り行き、推量あれ

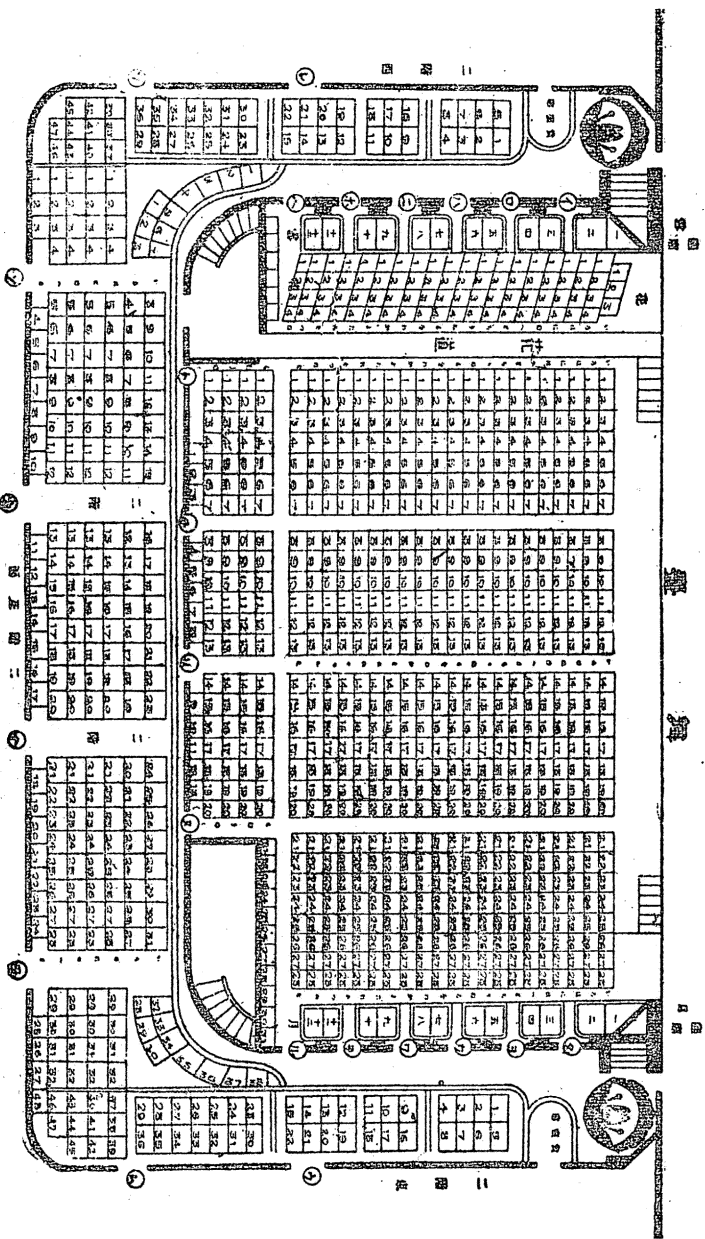
と血走る眼に無念の涙をこめ吐懐するのだつた。仔細を聞いた彌五郎は、思ひあたることありと、與市兵衛の死

骸の傷をあらためると、それは正しく鐵砲疵にはあらず、刃をもつてえぐつた傷口であつた。今此處へ来る道すら、鐵砲受けた旅人の死骸を見れば、それは九太夫の悴の悪黨定九郎だつた。それでは勘平の男を討つたは疑ひもなく定九郎が仕業、勘平は知らず男の仇を討つたのであつた。郷右衛門も感じ入り、今は息の勘平に、亡君の復讐の一味徒黨を明し、勘平をもその一味に加へることを約した。勘平は血潮したる臍腑をもつて血判し、そのまゝ息は絶えたのであつた。

かねて師直方に内通してゐる九太夫は、猶も由良之助の心底を探らんものと師直の復臣伴内を同道して祇園の茶屋へ來たが思ひの外、由良之助の放埒に二人はまづく安心するのであつた。

新橋舞場座席表

舞 臺



開場毎に篤き御愛顧を賜り謹んで御厚禮申上げます

當劇場は諸事皆様の御期待に反かぬ様懸命に努力致して居りますが、何事によらず皆様直接の貴重なる御言葉を頂きたう存じます。

「劇場御使用に就て」劇場を各種の御催し、例へば演劇公演、音楽會、舞踊公演、お波ひ、温習會、發表會、披露會、祝賀會、慰安會に御利用下さる様御願ひ申上げます。

お願ひ

- 一、お席の番號 を御自宅にもお印し置き下されば御急用御呼出しに御便利で御座います。
- 一、お帽子 は椅子の下へ。御婦人方の庇の廣いお帽子は後ろの人の邪魔になりますから、御遠慮願ひます。
- 一、御貴重品 はお席へお置きにならぬやう。
- 一、御携帶品 は預り所へ。
- 一、御食事は一幕前に御申付。
- 一、喫煙 及び御食事は観客席では固くお断り致します。
- 一、御氣分の悪い方は係員に御申出た。

一、お忘れもの 御紛失は直ちに係員へ御届を。

一、寫眞撮影 當場内では特定寫眞班以外は固くお断り致します。

一、汽車の時間 は萬承り所へ。

一、お電話 は一階右側預り所、公衆電話は一階東西に御座います。

一、御履物 御傘などは必ず一幕前に御受取下さい。

一、係員の不行届 場内設備の缺點は御遠慮なく御申聞け下さる様。

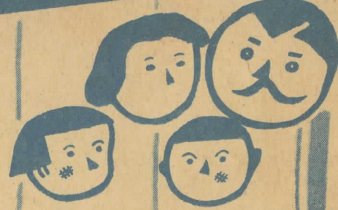
一、俄雨の際 はお客様の爲に簡便な方法で雨傘の用意がしてございますから何卒係員に御申出てください。

一、舞臺上 大道具照明其他にお氣付の點は何卒御教示を願ひます。

京橋區木挽町 新橋演舞場

支配人 藤井麟太郎

スプロッド油肝^{ミツワ}



一家総はりきり

無病息災

戦場は吾々の身近かに續いております。最後の勝利を

確保する迄、一億同胞みな健康であらねばなりません。増産に挺身する人も勉學する人も、家庭を護る人も、こぞつて張り切つた生活をいたしませう。

不足しがちな栄養を総合的に攝取する必要があります。本劑は各種の栄養素を多角的に含有し且つ完全乳化してありますから胃腸障害を起す心配もなく吸収いたします。

毎日一顆——二顆

ミツワ石鹼本舗藥品部

許特賣專

ラオゼ

磨齒用薬



生活の
科學化は
手近から

親しまれて
いる歯磨の科學化こそ手近で且
も必要な事です。徒らに遠大な物を希まづ
とも、まづ最も身近にあるものから心がけ
るべきで、例へば、朝に夕に私共の生活に
つ有効的です。

主劑ゼオライトの持
つ吸着・置換・收斂
の三大科學作用は豫
防齒科醫學多年研究
の所産であり、齲齒
齒槽膿漏の完全豫防
と同時に、咀嚼力を
強化いたします。

こんなお方は
せひせオラを

- 1 齒を強く美しくと望む方
- 2 林檎を噛むと血の出る方
- 3 齒刷牙を使ふと血の出る方
- 4 むし齒が多くて御困りの方
- 5 咀嚼力が不充分で困る方
- 6 在來品に御不満の方

錢八廿 共稅

⊙ 定價部金貳拾錢

部品藥舖本廠石ワツミ